

24 抗コリン剤に抵抗性を示した夜尿症をとまなわない小児の頻尿症状に対して漢方薬が奏効した 2 例

秦野北クリニック¹⁾、東海大学 東洋医学科²⁾

駒井 好信¹⁾、駒井 悠子¹⁾、野上 達也²⁾

【緒言】泌尿器科を主診療科とする当院における初診患者に占める小児例は7.8%、そのなかで夜尿症を除く排尿障害を主訴に受診するのは9.6% 程度である。そのなかには経過観察にとまなう成長のみで改善することもあるが、今回われわれは抗コリン剤抵抗性の頻尿に対して証に基づき漢方を処方し有効であった 2 例を経験した。

【症例1】10代後半の女児。3年前から昼間12回(夕方多い)/夜間1回、排尿後に残尿感をともなう頻尿を自覚し近医受診。外出時など緊張すると症状が増悪するため心因性頻尿としてイミダフェナシン・クロチアゼパムを2年間処方されるも改善傾向みられず当院受診。脈候は浮沈中間・虚実中間。舌は軽度歯痕あり舌尖が紅い。腹力3/V、心下痞硬を認め軽度の臍上悸を触知した。入眠障害は少ないが夢が多く、夜間排尿で起きるときに特に悲しいことがあるわけではないのに泣いてしまう。尿意切迫はあるが失禁はほとんどない。抗コリン剤を休薬とし、ツムラ甘麦大棗湯エキス剤を7.5g 3xで開始。3週間ほどで排尿回数は昼6回/夜間0-1回となり、夜間起きたときの流涙がほぼ消失した。同剤を減量して継続し、症状が安定している。

【症例2】10代後半の男児。4ヶ月前から外出すると1時間おきに尿意を自覚し排尿するが少量のみで、学校や塾を含めた外出時に尿意が気になって集中できない。3年ほど前に同様の症状が出現したがそのときは近医で処方されたイミダフェナシンで改善したため今回も内服したが効果がないため当院受診。脈候は浮沈中間、やや実。舌は歯痕と舌下静脈怒張がいずれも軽度。腹力 4/V で両側胸脇苦満とごく軽度の臍上悸を認めた。自宅にいるときの排尿間隔は2時間以上であり、夜間頻尿はない。尿意切迫はあるが失禁は一度もない。抗コリン剤を休薬とし、ツムラ甘麦大棗湯エキス剤を7.5g3xで開始。数日で学校や塾での尿意自覚頻度減少を自覚し、それまで授業ごとにトイレに行っていたのが、内服後3週間目頃から2時限以上もつようになった。開始から6ヶ月で徐々に減量していき、現在はテスト期間や初めての場所に行くときだけの内服で症状はコントロールできている。

【結語】小児の排尿障害は尿失禁や夜尿症の頻度が多いものの、いわゆる成人における過活動膀胱と類似した症状についてのまとまった報告は少ない。漢方薬は成長段階にある小児例において、証に基づき試してみてもよい選択肢であると考えられた。